

シリア

——クルディスタンの変貌——

勝 又 郁 子

内戦と「イスラム国」との戦いを通じてクルドが大きな変化を遂げつつある。トルコのクルディスタン労働者党（PKK）に近い勢力が台頭し、米軍はじめ有志国軍のパートナーとして実績を積み重ね、ロシアとの関係も築いて支配地域を広げてきた。だが彼らをテロ組織とみなすトルコの攻撃も熾烈だ。シリア北部の「自治」は存続できるだろうか。

●民主連合党と人民防衛隊

PKKとシリアの関係は古い。オジャラン党首ら幹部は、PKK設立後間もない1980年のクーデター直前にトルコを脱出してシリア側のコバネに潜伏した。以来、20年近くにわたってシリアはPKKを保護し続けた。だが、トルコによる軍事的な圧力に屈して1998年秋、アサド大統領がPKKを放逐し、オジャラン党首はケニアで逮捕される。その後、シリア国内のPKKに対する取り締まりは厳しくなったが、2003年に民主連合党（PYD）が結成された。シリア出身のPKK党員が中心になって設立したとみられている。翌年にはPYDの武装部門として人民防衛隊（YPG）が発足した。PYD・YPGはPKKとは別組織だと主張するが、一般的にはPKKの関連組織とみなされている。

ただ、シリアにおける「イスラム国」との戦いでPYD・YPGをパートナーとする米国は、PKKとは別組織との建前だ。PKKがトルコ、米国、EUでテロ組織と指定されていることから、トルコはテロとの戦いの標的を「イスラム国」、PKK、YPGとしているためだ。米国の建前論と、PKKとの和平プロセスが崩壊した後のトルコ政府の強硬姿勢が両国の溝を深めている。

●「北シリア民主連邦」

PYD・YPGは、思想的にはオジャランPKK党首へ

の傾倒を隠そうとせず、オジャラン党首が提唱する「民主的自治」、「民主連邦」を目指す。小さな共同体が基本となり、共同体が集まって村や町をつくる、というようにボトムアップ方式で「民主連邦」を形成する。PYD・YPGはシリア北部の支配した町や村で暫定的な行政を行っていたが、2014年1月にエフリーン、コバネ、ジャジーラがそれぞれ「カントン」（州）として「民主的自治」を宣言した。2016年3月には、その後「イスラム国」から解放された村や町も参加して「北シリア - ロジャヴァ民主連邦」（のちに「北シリア民主連邦」に改名）樹立を宣言し、設立評議会を発足させた。ロジャヴァとはクルド語で西、つまり西クルディスタンである（地図参照）。

「北シリア民主連邦」に正統な法的根拠はない。だが、PYD・YPGが支配している地域には医療や教育を含む行政活動を行う独自のメカニズムが機能している。湾岸戦争後の1992年にイラクで発足した「クルディスタン自治区」と、その点では同じだ。「クルディスタ



（注）■はYPGおよびYPG主体のシリア民主軍が展開する地域。

四角内の地名は「北シリア民主連邦」を形成する3地域。

（出所）報道などをもとに筆者作成。



イラク・クルディスタン地域のカンディール山にあるPKKゲリラの墓地。1980年代に死亡したゲリラの墓も移された。この墓地は2017年、トルコの越境空爆によって破壊された（筆者撮影）

ン自治区」も法的な根拠をもたず、一方的に宣言した「事実上の」自治区だった。

「北シリア民主連邦」設立評議会は2017年7月に3地域6カントン制に改編し、同年秋から2018年初めにかけて順次、選挙を実施すると発表した。この場合の「地域」は、連邦区としての「地域」で、連邦体制をとるイラクのイラク・クルディスタン地域で使われている「地域（ヘレーム）」と同じだ。9月22日には、数十から数百家族を単位とするコミュニーの選挙が行われたと報じられた。

「北シリア民主連邦」の改編からうかがえるのは、かつてのイラク・クルドがそうであったように、「北シリア民主連邦」が将来的なシリアの連邦体制を求め、そのモデルを築こうとしていることだ。少なくとも建前は分離独立を目指してはいない。イラク・クルドがイラク戦争後も「独立の権利」を公言したうえで「連邦制のイラクへの自主的な参加」を表明していたのとは立場を異にする。

●アサド政権とクルド

PYD・YPGがほかの多くの反体制派と異なるのは、内戦を通じて、政府軍や親アサド政権派と大きな戦闘を行っていない点だ。PYD・YPGは政権を批判するが、協議を前提とする立場だ。反体制派の多くはアラブ主導である。アサド後の新体制でクルドの権利を保

障するという確約がない限り、アラブ主導の新政権下でもクルドへの弾圧が繰り返されるかもしれない。それならば現政権から譲歩を引き出す方が現実的だろう。

アサド政権は治安が悪化していた2011年春、それまで市民権を持っていなかった数万人のクルド人に市民権を与えた。クルド懐柔策だといわれた。さらに2012年7月、シリア軍がコバネやエフリンなどから撤退し、そのあとをPYD・YPGが支配するようになった。シリア軍の撤退は首都ダマスカスやアレッポ周辺に軍隊を再展開させる必要に迫られたからだが、政権にも、ほかの反体制派やイスラム勢力に支配地域を拡大されるよりはクルドへの譲

歩を選択するという判断があったはずだ。シリア軍とYPGの間にも戦闘は起きているが、いずれも比較的短期間で停戦が成立している。カミシリはクルドの支配下にあるが、そのなかに今でも政権側の小規模な治安組織が「共存」状態にある。

●米国とロシアのパートナーに

クルドにとって次のターニングポイントとなったのは、2014年秋のコバネの攻防戦だ。事実上の自治を始めていたトルコ国境沿いのコバネが「イスラム国」の猛攻を受け、陥落寸前の危機に陥った。トルコ側から見えることもあって世界中のメディアが集まり、刻々と戦況を伝えた。トルコがこの激戦を傍観していたこと、YPGに女性戦闘員が多数いること、次々と外部からボランティアが戦いに加わる様子も伝えられ、コバネは「イスラム国」との戦いの象徴的な戦場となった。軍事専門家からコバネは軍事的な要衝ではないとの指摘もあったが、米国は人道的にもコバネを放置するわけにはいかなかった。米国はYPGを支援する空爆に踏み切った。トルコの反対を押し切るかたちでPYDのサーレハ・ムスリム議長（当時）らと接触し、連携を強め、YPGはシリアにおける米軍が最も信頼しうるパートナーとなっていった。

2015年10月には、YPGを中心に、それまでYPGと共闘することが多かったアラブ武装組織とともにシリ

ア民主軍という連合が結成された。アラブ人が多数派の地域まで作戦が拡大してきたからだ。トルコへの配慮もあった。米軍が武器を支援する対象はクルドではなく、シリア民主軍に参加しているシリア・アラブ同盟に限るという建前だ。

続いてまた1つ、クルドの転機が訪れた。2015年11月、トルコ軍がアサド政権を擁護するロシアの戦闘機を領空侵犯だとして撃墜したことだ。ロシアはトルコに経済的な報復措置をとると同時に、トルコが支援する反クルドの反体制派が支配する地域に集中的な空爆を行った。これがクルドを利した。「敵の敵は味方」の論理だが、PYD・YPGがアサド政権と一定の関係を保っていることの証左ともいえた。

トルコのエルドアン大統領は翌年6月、ロシアに謝罪して関係を修復し、夏には対テロ戦争の大義を掲げてシリアに地上軍を投入した。作戦の標的は「イスラム国」とPKKおよびPYD・YPGである。トルコ軍のクルドに対する攻撃は今も続いているが、ロシアはいったん築いたクルドとの関係を容易に放棄するつもりはなさそうだ。

●PKK離れは可能か

「イスラム国」からシリアが解放された後、「北シリア民主連邦」が存続できるかどうか——米国もロシアも「イスラム国」との軍事作戦が終了すればクルドを見捨てるのではないか、というクルド側の懸念はすでに多くのクルド・ウォッチャーが指摘するところだ。

PKK・PYD・YPGを同一のテロ組織とみなすトルコの姿勢が当面、変わらないのであれば、唯一の道はPKKとPYD・YPGの切り離しだろう。PKKはシリア北部とイラクのシンジャール、本拠地のカンディール山をつなぐことを重視している。だが、シリア・クルドにとっては、領土的にイラク側と一体化させることの優先度は必ずしも高くない。最優先は「北シリア民主連邦」の存続だ。むしろイラク・クルドとの関係を正常化させれば、経済的な孤立など多くの問題は解決する。トルコと交渉できる環境にもつながるだろう。



PKKの諸組織を束ねる立場にあるジェミル・バイク（筆者撮影）

そこにPKKとPYDに温度差が生じる可能性がある。2017年9月、アサド政権は「イスラム国」との戦いが終わったのち、クルドと自治交渉を行う用意があると示唆した。シリアの将来図は不透明なままで、クルド側からの反応も伝えられていない。それでもPYDにとっては政権が認める自治は考慮に値するかもしれない。

親イラク・クルドの既存の中小政党は武装組織が弱いこともあり、「イスラム国」との戦いを通じてすっかりPYD・YPGの陰に隠れてしまった。お互いライバルであるクルド勢力が集い、指揮・調整する最高機関として2012年に設立された「クルド最高評議会」を再始動させることも必要となるだろう。

（かつまた いくこ／フリージャーナリスト）